

## 海の道と川の道 ... 船・舟の思い出

開拓と舟や船は、切っても切れない関係にあります。本州などから十勝へは、多くの人が函館経由で船に乗って来ています。

開拓して畑を開き、できた作物は川舟によって大津まで、そして海の船によってほかの地方へ送られました。生活道具や本州からの便りなど、ものや情報は川舟が運び上げてきました。

ここでは、「池田町開拓夜話」から、移住してきた時の思い出、そして、川舟に関する記録などを紹介します。(一部略。漢字やかなづかいは原文のまま)

新津とよじさんの話 大津を目の前にして

「私達が出発したのは明治二十九年(1896)二月十一日でした。

今では長野県佐久市とって大きな町になっているのですが、そのころはずっと南に下った南佐久郡小海村という片田舎の貧しい村でしたので、みんな移住のために出てゆくという有様でした。

主人の亀蔵は、一足先に利別太へ来ていました。フンベ山付近の開墾に当たっていた兄の繁松を頼り、先乗りしていたので、私達は指示された通り小海村を発って陸路を北上し、新潟港から船に乗ったわけです。

海のない信州(長野県)から突然日本海に出たものですから、その広く果てしもない海というのを見て、まずはびっくりしたものです。

途中、船は津軽海峡を抜けて函館に立ち寄り、ちょっと一息ついて大津へ向かおうと風待ちの帆をあげて出発したわけです。

あと何日かで主人のいる開拓地に着くのかと思うと、疲れもいっぺんに吹き飛んで、初めて北の国のトカチというところの感じが肌に伝わり、心は宙を飛び思いましたが、エリモ岬あたりで暴風雨に遭い、船は難航しました。

そして五日五晩波にもまれながら、ようやく目的地の大津を目の前にしたのですが、やはり波が高く荒れていましたので沖揚げができず、一日二日と風待ちをしたのですが、その間の長かったこと、今でも忘れることはできません。

結局上陸や荷揚げは不可能ということで、船は一旦函館へ引き返すことになりましたが、私達は気が気ではありませんでした。

まだ二十歳になったばかりの若妻だった私は、二歳の赤ん坊キクを抱えておまして、この船旅のどさくさで母乳も上がってしまい、言うに言われぬ苦勞をしたものです。

一応函館へ引き返した船は、風待ちということで全員が下船させられました」

新津とよじさんの話 大津上陸をあきらめ、釧路へ

「下船から二十日経って海も風た(ないだ)ということで再び函館を出港することができましたが、やはり大津の沖は波が高く、迎いの舳も接舷できず、またまた目的港の大津をあきらめて、今度は釧路へ向かうことにしました。

釧路なら港も発達しているということで、とにもかくにも一日も早く上陸するには贅沢など言っておれません。

船はまた沖へ出て釧路へ向かいました。

運が悪かったんですね。私達の乗った船は東光丸とって、たしか百人乗りと聞きましたが、何トンの船であったかは覚えていませんが大きな船でした。

しかし釧路の海上もやっぱり波が高く、河口へ着く予定のものが変更になって、沖合で舳に乗り移ることになったわけです。

ふつうなら歩み板のようなものを渡すのですが、波の上下で船と船の差が大きく、到底歩み板など渡すわけにはゆかず、軽業師みたいに波の上下を見計らって水夫の掛け声に合わせて舳に飛び移るわけです。

凍りつく冷たい海水を頭からかぶって、死ぬか生きるかの瀬戸際での上陸で、まったく生きた心地ではありませんでした。

こんなことなら小海村にいて、貧乏でもいいから百姓をしていた方が、よっぽどよかったと何度も考えました。

でも苦勞の甲斐があつてみんなが無事に上陸できたことは、天にも昇る心地で、海の神様にも風の神様にも感謝し合いました」

(その後、とよじさんたちは三日半かけて大津まで歩きます。大津で夫である亀蔵さんと再会し、馬そりに乗って利別太に到着しました)(新津繁松 p163)

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今、そして未来へ

用語 さくいん

1 風(なぎ): 風がやみ、波がなくなり、海面がおだやかになったようす。  
2 舳(はしけ): 本船と岸との間を往復して、人や荷物を運ぶ小舟。

3 石(こく): 石とは、容積の単位。船の積載量(せきさいりょう)を表すときには、1石=10立方尺(約280リットル)とした。米で約230kg。70石の米で、約16トンになる。(一般的には1石=100升(約180リットル)。米で約150kg)

程度<sup>ていど</sup>の差<sup>さ</sup>はありましたが、多く<sup>おほく</sup>の入植者<sup>にゅうしょくしゃ</sup>が十勝へ来るだけでひどい苦勞<sup>くろう</sup>をしています。海<sup>うみ</sup>での船<sup>ふね</sup>よいよ陸<sup>りく</sup>の悪路<sup>あくろ</sup>のため、大変<sup>たいへん</sup>な目にあい、その無理<sup>むり</sup>がたたってお年寄り<sup>としよ</sup>や小さな子ども<sup>こ</sup>が亡くなることもあったそうです。

アイヌの人たちは、丸木舟<sup>まるきぶね</sup>（チブ：128）をあやつって十勝川<sup>じゆしやく</sup>などの川<sup>がわ</sup>を上<sup>あ</sup>下<sup>くだ</sup>し、人<sup>ひと</sup>やもの<sup>もの</sup>を運<sup>は</sup>び、あるいは魚<sup>いし</sup>をとっていました。

川<sup>がわ</sup>ぞいに入植<sup>にゅうしょく</sup>した人<sup>ひと</sup>たちも、丸木舟<sup>まるきぶね</sup>を持つことが多く、同じように川<sup>がわ</sup>を交通路<sup>かうつうろ</sup>として利用<sup>りよう</sup>していました。大洪水<sup>だいこうすい</sup>の時には、この丸木舟<sup>まるきぶね</sup>が避難<sup>ひなん</sup>や救助<sup>きうすう</sup>に使<sup>つか</sup>われて

います（ p187）。  
一方<sup>ひと</sup>で、大津<sup>おおつ</sup>～利別太<sup>としべつ</sup>を中心<sup>ちゆうしん</sup>とした川舟運送<sup>がわふねうんそう</sup>は発展<sup>はつてん</sup>を見せませす。丸木舟<sup>まるきぶね</sup>だけではなく、大きな二十五石舟<sup>にじゅうごこくぶね</sup>・五十石舟<sup>ごじゅうこくぶね</sup>・七十石舟<sup>ななじゅうこくぶね</sup>が十勝川<sup>じゆしやく</sup>などを行きかうようになりますが（ p175）、そこには舟<sup>ふね</sup>で働く人<sup>か</sup>たち（川舟人夫<sup>がわふねにんぶ</sup>・船頭<sup>せんどう</sup>）の苦勞<sup>くろう</sup>がありました。

川舟<sup>がわふね</sup>で働いた高橋桂次郎<sup>たかはしけいじろう</sup>さんの思い出<sup>おもいで</sup>を、息子<sup>むすこ</sup>の喜智<sup>きち</sup>さんが語<sup>かた</sup>っています。

重労働<sup>かむふねにんぶ</sup>の川舟人夫<sup>が</sup>

「父桂次郎<sup>ちちけいじろう</sup>は、明治三十一年<sup>やま</sup>（1898）三月八日<sup>しんげつ</sup>、山形県高島町<sup>やまがたけんたかしまち</sup>の郷里<sup>きやうり</sup>を徒歩<sup>こ</sup>で出発<sup>わたらせ</sup>し山<sup>い</sup>を越<sup>こ</sup>えて渡瀬<sup>わたらせ</sup>で一泊<sup>いっぱく</sup>、宮城県白石<sup>みやぎけんしろし</sup>駅<sup>えき</sup>で乗車<sup>あおもり</sup>して青森<sup>あおもり</sup>へ向<sup>むか</sup>かった。青森一泊<sup>あおもりいっぱく</sup>、連絡船<sup>れんらくせん</sup>で函館<sup>はこだて</sup>へ、そして大津<sup>おおつ</sup>行<sup>ゆ</sup>きの貨物<sup>かもつ</sup>運搬船<sup>うんぱんせん</sup>に乗船<sup>のり</sup>して出港<sup>しゅつこう</sup>した。

三月十五日<sup>しんげつごじゅうごくにち</sup>に大津港<sup>おおつこう</sup>に到着<sup>とちやく</sup>したが波<sup>なみ</sup>が高く上陸<sup>じやうりく</sup>できず、十八日<sup>じゅうはちにち</sup>に至<sup>いた</sup>ってようやく上陸<sup>じやうりく</sup>することが出来<sup>でき</sup>た。山形県<sup>やまがたけん</sup>の故郷<sup>こきやう</sup>を発<sup>と</sup>ってから十三日<sup>じゅうさんにち</sup>を要<sup>と</sup>して利別太市<sup>としべつがし</sup>街<sup>まち</sup>に到着<sup>とちやく</sup>したものであった。

父桂次郎<sup>ちちけいじろう</sup>は利別<sup>としべつ</sup>に到着<sup>とちやく</sup>後<sup>ご</sup>、さしあたり生計<sup>せいけい</sup>のため十勝川<sup>じゆしやく</sup>を往來<sup>おうらい</sup>する川船<sup>がわふね</sup>の日雇<sup>ひやとい</sup>人夫<sup>にんぶ</sup>として大津<sup>おおつ</sup>通<sup>つう</sup>いの中型<sup>ちゆうぎゆう</sup>船<sup>せん</sup>（五十石舟<sup>ごじゅうこくぶね</sup>）に乗り込<sup>のりこ</sup>んだ。

作業<sup>おおつこう</sup>は大津港<sup>おおつこう</sup>で荷物<sup>に</sup>を川船<sup>がわふね</sup>に積み込み内陸<sup>ちゆうりく</sup>へ輸送<sup>ゆそう</sup>するもので、風<sup>かぜ</sup>の無い時<sup>とき</sup>には川船<sup>がわふね</sup>にロープ<sup>ろーぷ</sup>をかけ残雪<sup>ざんせつ</sup>の川岸<sup>がわがし</sup>を人力<sup>じんりき</sup>で上流<sup>じやうりゆう</sup>へ曳<sup>ひ</sup>き上げるとい<sup>い</sup>う作業<sup>おおつこう</sup>もしばしばで、日<sup>ひ</sup>の出<sup>で</sup>から日没<sup>にちぼつ</sup>までの重労働<sup>じゆうらうどん</sup>であった。大津<sup>おおつ</sup>から利別<sup>としべつ</sup>までは、二<sup>に</sup>、三日<sup>さんにち</sup>を要<sup>と</sup>したものだ。

当時<sup>ちんぜん</sup>の賃金<sup>せんぎん</sup>が一日<sup>いちにち</sup>大人男子<sup>おとなおとこ</sup>三十五銭<sup>さんじゅうごせん</sup>から四十銭<sup>しじゅうせん</sup>、食費<sup>しょくひ</sup>を雇<sup>か</sup>い主<sup>ぬし</sup>に納<sup>おさ</sup>めると十五銭<sup>じゅうごせん</sup>から二十銭<sup>にじゅうせん</sup>となり、一ヶ

月<sup>げんめい</sup>休<sup>く</sup>まず懸命<sup>けんめい</sup>に働<sup>くら</sup>いて五円位<sup>ごえんぐら</sup>であった。

秋<sup>あき</sup>になると内陸<sup>ないりく</sup>の農産物<sup>のうさんぶつ</sup>を積み大津<sup>おおつ</sup>へ下<sup>くだ</sup>るが、大雨<sup>おほい</sup>の後の増水<sup>ぞうすい</sup>時には川底<sup>じゆすい</sup>に流木<sup>りゅうぼく</sup>も横たわり、それを川<sup>がわ</sup>に入<sup>い</sup>って除去<sup>じよきよ</sup>しながらの航行<sup>かうかう</sup>で、水泳<sup>じゆうず</sup>の上手<sup>じゆうず</sup>なアイヌの青年<sup>やと</sup>を雇<sup>か</sup>って乗り込<sup>のりこ</sup>ませることもあったという」

この舟<sup>ふね</sup>をひき上げる作業<sup>ひじやう</sup>は非常<sup>ひじょう</sup>につらかったようで、思わず涙<sup>なみだ</sup>が出ることもあったということです。

一方<sup>ひと</sup>で、川舟運送<sup>がわふねうんそう</sup>の人夫<sup>にんぶ</sup>・船頭<sup>せんどう</sup>には楽しみ<sup>たのしみ</sup>もあったそうです。左ページ<sup>ひだり</sup>の新津<sup>しんづ</sup>とよじさん<sup>とよじさん</sup>の夫<sup>おつと</sup>、亀蔵<sup>かめぞう</sup>さんは、利別太<sup>としべつ</sup>で米<sup>こめ</sup>・酒<sup>さけ</sup>などの商売<sup>しょうばい</sup>をしていました。そのころ<sup>そのころ</sup>の話<sup>はなし</sup>を、孫<sup>まご</sup>の新津安弘<sup>しんづやすひろ</sup>さんが語<sup>かた</sup>っています。

ちょっと「いけない」楽しみ

「祖父<sup>そふ</sup>の新津亀蔵<sup>しんづかめぞう</sup>は明治三十二年<sup>しんげつ</sup>（1899）頃<sup>ころ</sup>、兄繁<sup>あに</sup>松<sup>まつ</sup>が始めた利別太<sup>としべつ</sup>の新津商店<sup>しんづしょうてん</sup>を引き継<sup>つ</sup>ぎ、米<sup>こめ</sup>、酒<sup>さけ</sup>をはじめ日用雑貨<sup>にちようざつか</sup>を販売<sup>はんばい</sup>していました。（ p163）

酒<sup>さけ</sup>は開拓時代<sup>かいたくじだい</sup>唯一<sup>たいてい</sup>の楽しみ<sup>たのしみ</sup>で、大津<sup>おおつ</sup>の熊谷商店<sup>くまがいしょうてん</sup>から仕入<sup>はんばい</sup>れて販売<sup>はんばい</sup>していたのです。

大津<sup>おおつ</sup>から利別太<sup>としべつ</sup>までは帆かけ<sup>ほ</sup>の川船<sup>がわふね</sup>が往來<sup>おうらい</sup>していましたが、下<sup>くだ</sup>りはよいとしても、上<sup>あ</sup>りは大変<sup>たいへん</sup>で、風<sup>かぜ</sup>の吹<sup>ふ</sup>かない時<sup>とき</sup>は船頭<sup>せんどう</sup>たちが船<sup>ふね</sup>から降り<sup>お</sup>りて綱<sup>つな</sup>で船<sup>ふね</sup>を引き上げるのです。

大変<sup>たいへん</sup>な苦勞<sup>くろう</sup>だったわけでした。

そして酒樽<sup>さかだる</sup>が大津<sup>おおつ</sup>を出<sup>で</sup>てようやく利別太<sup>としべつ</sup>の船着場<sup>ふなつきば</sup>に陸揚げ<sup>りくあげ</sup>された時<sup>とき</sup>、二斗樽<sup>にとだる</sup>（約36リットル入り）の中身<sup>ちゆうしん</sup>は一斗七<sup>いっとうしち</sup>、八升<sup>はつしょう</sup>（約30～32リットル）に減<sup>へ</sup>っているというのです。

もちろん輸送中<sup>ゆそうちゆう</sup>にこぼれたわけでも、また蒸発<sup>じやうぱつ</sup>したわけでもなく、船頭達<sup>せんどうたち</sup>が輸送中<sup>ゆそうちゆう</sup>に飲<sup>の</sup>んでしまったというのです。

この頃<sup>ころ</sup>十勝川<sup>じゆしやく</sup>の川船<sup>せんどう</sup>の船頭<sup>せんどう</sup>をしていた柳谷芳太郎<sup>やなぎたによし たろう(?)</sup>さんは、後年<sup>こうねん</sup>「新津<sup>しんづ</sup>さんの酒<sup>さけ</sup>はよく飲<sup>の</sup>ませてもらったもんだ」と言<sup>い</sup>っていたといいますが、祖父<sup>そふ</sup>は別に文句<sup>もんく</sup>を言<sup>い</sup>うわけでもなく、当たり前<sup>あたりまえ</sup>のこととして受け取<sup>う</sup>ったと言<sup>い</sup>います。

それは、船頭達<sup>せんどうたち</sup>が飲<sup>の</sup>んでしまった例<sup>れい</sup>えば二升分<sup>にしょうぶん</sup>（約3.6リットル）は、残<sup>のこ</sup>っている一斗八升<sup>いっとうはつしょう</sup>に加算<sup>かさん</sup>して売<sup>う</sup>るから損<sup>そん</sup>は決<sup>き</sup>してなかったというわけでした」

いけないことではありますが、「賃金<sup>せんぎん</sup>」の一部<sup>いちぶ</sup>としたという、おらかなところもあつたころの話<sup>はなし</sup>です。

4 川舟人夫(かわふねにんぶ):五十石舟で10人、七十石舟で20人ほど必要だったという。  
5 銭(せん):昔のお金の単位。100銭=1円。明治31年(1898)の手紙が2銭(翌年3銭)、明治30年(1897)の東京で米10kgが1円12銭、映画が20銭。(『値段の

明治大正昭和風俗史 上下)より)  
6 帆(ほ):川をのぼる時は山背(やませ)を使う。山背とは海上からふいてくる冷たくしめった北東風のことをさす。